タイトル：初めての海外短期留学

化学専攻　分析化学研究室　博士前期課程一年　加藤　雄大

派遣場所：ワシントン大学　化学科　高感度生物分析研究室　（Dovichi 研究室）

期間：2007/10/5～12/28

実施内容:研究内容習得、語学研修

【研究内容】私の訪問させて頂いた研究室では、病原細胞の発現過程、脳内物質の代謝経路の解明を目的としたタンパク質分析を行っており、分析手法として主にキャピラリー電気泳動（ＣＥ）を用いていました。各研究テーマを持つ学生に一定期間付いて回ることを許してくださり、全員の研究テーマを直接教わる事が出来ました。そして私自身にもＣＥ装置を提供して頂き、分離モードごとのキャピラリー修飾の方法から、サンプルの蛍光ラベリング、検出までを実際に一人で行えるようになりました。私にとっては、生体サンプルを使った実分析や、キャピラリーを二本繋げた二次元電気泳動という技術も初めてであるため、ほぼ何もかもが新鮮でした。その分得るものも多く、三ヶ月という短い時間ながら、技術そのものはもちろんのこと、プロテオーム全体の流れ、それぞれの問題点など、生物分析研究室ならではである事を多く学びました。また、研究室のグループミーティングでは研究内容を英語で発表し、質疑応答をする機会も得る事ができました。

【感想】今回の渡航は私にとって初めての海外体験であったにも関わらず、渡航準備が思うように進まなかったこともあり渡米先の宿を決めずに出発しました。初めての海外で、初めての宿探し。道行く人に誰彼構わず声をかけ、最も安い宿を聞いて回ることから私の留学はスタートとなりました。完全に背水の陣で臨んでいた自分の英語が思ったより通じる事に励まされたのと、必要性如何に関わらず自分から必死で会話をする日々の生活から、英語で話しかける事、話しかけられる事に対する恐怖心は全く無くなりました。また、シアトルには留学生支援の団体が幾つもあるため、私は三つの団体に所属していました。英会話クラス等様々な活動に参加することを通して、色々な国籍の学生・社会人と交友関係を持つ事ができ、帰国してからも連絡を取り合える友達も作る事が出来ました。専門の知識、技術の習得はもちろんのこと、海外ならではのシステム、考え方を直に体験出来た事、英語を使ったコミュニケーション、国籍にこだわらない対人関係を構築することができた今回の留学経験が私の人生において大変大きな糧となったことは間違いありません。最後に、このような大変有意義な留学を実現するに当たり、本当に親身にご尽力下さった渡會先生、研究室の諸先輩方、留学生担当の Dino 先生、そして快く受け入れてくださった Dovichi 先生に改めて感謝の意を述べたいと思います。本当にありがとうございました。

最後のグループミーティングで
Dovichi 研のメンバーと